

## コントロール尺度の作成と信頼性・妥当性の検討

中 島 由 佳\*

### Development and Validation of the Control Scale

#### Based on the Life-span Theory of Control

Yuka Nakajima

#### abstract

This article describes the development and validation of a brief self-report scale that measures the control strategies of individuals based on the life-span theory of control (Heckhausen & Schulz, 1995). Control strategies generated by 62 participants were classified according to the taxonomy of the life-span theory of control. Study 1 used data from 236 female recruits. Factor analysis yielded four factors, each of which was found to embody the nature of four control strategies defined by the life-span theory of control: selective primary control, compensatory primary control, selective secondary control, and compensatory secondary control. The results of examinations of internal consistency (Cronbach's  $\alpha$  was .72 to .84 for each factor) and test-retest reliability ( $r$  was .60 to .81 for each factor) showed high reliability of the scale. In study 2, using data from 1,192 high school students preparing for university entrance examination, construct validity was verified by examining the relation with a coping scale and scales assessing psychological well-being.

Key words : the Control Scale, the life-span theory of control, reliability, construct validity

#### 問題

外界および自己のコントロールによる人間発達については様々な視座から論じられてきた (Carver & Scheier, 1981; Rothbaum, 1982; Skinner, Edge, Altman, & Sherwood, 2003)。その中で Heckhausen & Schulz (1995) は、1次・2次コントロールの概念 Rothbaum (1982) に選択性と補償性 (Baltes & Baltes, 1990) の次元を加えた生涯コントロール理論を提唱している。1次コントロールは、外界を変えることで個人の欲求を満たそうとする行動、2次コントロールは外界に適応するために、認知的評価を変化させることにより情動や動機づけを調節する認知的な方策として捉えることができる。一方、選択性とは、数ある発達の進路や行動の可能性から資源の投資が最も有効となる選択を行うための方略、補償性とは、その選択が失敗に帰した場合、失敗や損失の自尊感情、情動、動機づけなどへの否定的な影響を緩和することで、選択性を保つための方略とされる。生涯コントロール理論では、これらの1次・2次コントロール次元と選択性・補償性の次元を組み合わせた4側面からなるコントロール、つまり、選択した目標達成のための行動である選択的1次、自己内の資源のみでは目標の達成が困難な場合に外界からの資源を活用する補償的1次、選択した目標に動機づけなどの認知的資源を集中させる選択的2次、失敗や損失の際の情動的・動機づけ的資源の減少を認知的に緩和する補償的2次、の4コントロール方略を状況に応

---

キーワード：コントロール尺度、生涯コントロール理論、信頼性、構成概念妥当性

\*平成15年度生 人間発達科学専攻

じて行使していくことで、ひとは目的達成のプロセスにおける方略の適用を絶えず調節し、発達を最適化し得る (Schulz & Heckhausen, 1993) と論ずる。

生涯コントロール理論に沿った実証研究はこれまでに多くなされてきた (e.g., Thurber & Weisz, 1997; Thompson, Collins, Newcomb, & Hut, 1996; Thompson, Nanni, & Levine, 1994)。しかし、コントロール方略については面接や自由記述、あるいは疾患や特定の出来事に沿って作成された尺度により調査されている場合が多く、そのためコントロール方略の効果についての一貫した結果が得にくいという問題がある。近年 Heckhausen & Schulz (1998) が、成人におけるコントロール方略の世代間の相違を検討するための OPS (Optimization of Primary and Secondary Control) 尺度を開発し、また五十嵐 (2002) がその短縮版を邦訳し、わが国における追試を試みている。しかし、これらの尺度における項目は抽象性が高く、日常における具体的な方略を反映していない。2次コントロールについては、塚原 (2002) がより外的妥当性の高い尺度を作成しているが、補償的2次コントロールのみに限られている。そこで本研究は、生涯コントロール理論に準拠して1次・2次、選択性・補償性の4次元を包括的に扱い、しかも目的達成過程において実際に使用されている方略から項目を採用した、より外的妥当性の高いコントロール尺度の作成を試みる。

ところで、コントロールが発達過程における目的の達成や調節のための方略であるのに対し、それと類似した概念として、脅威やストレスへの対処方略としてのコーピングがある。コーピングは様々な方略を内包しうる非常に幅の広い理論である (Skinner, Edge, Altman, & Sherwood, 2003) が、その中で Lazarus & Folkman (1984) は、脅威への対処法は、直接にその問題の解決に取り組む“問題焦点型対処”と情動状態の改善に焦点を当てる“情動焦点型対処”の2方略に大別できるとし、これをもとにわが国でも、尾関 (1993) の問題対処、情動対処、回避・逃避を始めた様々なコーピング尺度が開発されてきた。コーピングは、行動と認知的評価をそのプロセスに組み込んだ点において、コントロール理論と概念的に共通している。しかし、コーピングには未だ、次元の分類や尺度の内容に決定的な定説がなく、様々な状況、対象に応じて開発、使用されている。この点から、目的達成のプロセスにおける状況への対処を行動・認知×選択性・補償性の4側面の方略で説明するコントロール理論は、コーピングよりも理論的枠組みが明確であると言えよう。さらに、ストレスへの対処もまた、目的達成プロセスの一段階 (Heckhausen & Schulz, 1998) であることから、同じ対処方略でありながらもコントロール方略は、コーピング過程を内包した、発達過程における認知的・行動的対処であると考えられよう。この点から、目的達成のプロセスにおける状況への対処を行動・認知×選択性・補償性の4側面の方略で説明する生涯コントロール理論に準拠して作成されるコントロール尺度は、コーピング尺度とは構成概念的に類似しながらも、独自の構造や機能、特質を持った尺度であることが予想される。

また、各コントロール方略は、精神的健康とも深い関係にあることが示されてきた。情動については、1次コントロールによる目的達成は正の情動を増すこと (Schulz & Heckhausen, 1993)、また目的の達成失敗や喪失の際に経験される負の情動は、自分で環境を変化させることのできる場合には1次、環境を変えることのできない状態においては補償的2次による対処が、その低減に効果的である (Schulz & Heckhausen, 1993; Thurber & Weisz, 1997) ことが報告されている。抑うつについては、自分の力で状況を変えられるという信念を持つ場合は1次、1次が機能しない状況においては2次コントロールが、抑うつの低減に効果的であることが示され (Thompson, Collins, Newcomb, & Hut, 1996; Thompson, Nanni, & Levine, 1994)、さらに Weisz, Sweeney, & LeGagnox (1997) は、1次・2次コントロールを用いた児童の中等度の抑うつへのブリーフセラピー (the Primary and Secondary Control Enhancement Training; PASCET) において、抑うつの改善に効果が見られたことを報告している。反芻思考については、とくに否定的な反芻思考は、目的を達成できなかった過去の事柄に関するものが多い (Carver, 1996) ことから、否定的な出来事に対する認知的評価をコントロールして変化させようとする補償的2次と反芻思考とは、言わば相克的な関係にあることが考えられる。また、「困難なことにも挑戦し成功させたい」という達成動機については、選択した目標達成のため外界を変えようとする行動である選択的1次、定めた目標に対し選択的に動機を高める選択的2次、外界からの資源を活用して目的を達成しようとする行動である補償的1次と、いずれも理論的に深い関係があると考えられる。これらのことから本研究においても、コントロール尺度は、情動、抑うつ、反芻思考、達成動機などの各変数との関係が予想される。

以上のことを踏まえ、本研究では、コントロール尺度の作成および、その信頼性と構成概念妥当性の検討を行う。

本研究では特に、発達領域・目的の選択性の世代間の相違 (Schulz & Heckhausen, 1993) を考慮し、青年期、成人前期における目的達成過程におけるコントロール方略を研究対象とする。具体的には、研究1では、成人前期の女子新規就職者における就職直後の職場適応でのコントロール方略の行使を測定し、尺度の信頼性を検討する。また研究2では、青年期における大学受験準備でのコントロール方略を測定し、コーピング、情動、抑うつ、反芻思考、達成動機との関連を見ることで、尺度の構成概念妥当性の検討を行う。受験生という対象者の属性を考慮し、コーピングの測定は大学受験生のコーピング尺度 (久田・箕口・千田, 1990) を使用する。

## 予備調査

### 目的

1次コントロール、2次コントロールそれぞれの尺度項目を作成する。

### 方法

**コントロール方略の収集と分類** 首都圏内および近畿圏内の大学受験を希望する高校3年生62人を対象に、受験をどのように捉え、また準備しているのか、どのような際に受験準備を苦痛と思うか、またその際の対処法などについて、大学受験前の平成11年9月～12月に面接調査を行った。収集した回答は、生涯コントロール理論における1次・2次コントロールの概念を反映するよう、Heckhausen & Schulz (1995) に記された分類 (目標達成行動の結果の予想、価値づけ、帰属、方略が現実的・非現実的であるか、機能的・非機能的であるかなど) に基づいて選択、分類された。その結果、1次コントロールに当てはまる20項目、2次コントロールに当てはまる29項目を採用し、それぞれ1次コントロール暫定尺度、2次コントロール暫定尺度とした。

**調査対象と手続き** 平成16年1月、首都圏内および近畿圏内の大学1年生874名 (男子576名、女子298名) を対象に授業時間の一部を利用し、質問紙調査を実施した。

**質問紙の内容** 大学受験勉強を行っていた際のコントロール方略について1次コントロール暫定尺度、2次コントロール暫定尺度を用いて測定した。1次コントロール項目については、“そうしなかった” から“よくそうした” まで、2次コントロール項目については、“そうではない” から“かなりそうだ” までの5件法でそれぞれ評定を求めた。

### 結果と考察

統計パッケージ SPSS (Ver. 11.5) を用い、1次コントロール暫定尺度20項目、2次コントロール暫定尺度29項目それぞれについて、因子分析を行った (以下、すべての分析にて SPSS を使用)。

**1次コントロール** 因子分析 (主因子法・プロマックス回転) の結果、第2因子までの固有値が2.0以上、累積寄与率が41.90%であったことから2因子解を採択した。因子負荷量が.40以下の項目を削除した後、再び因子分析を行ったところ、2因子構造が認められた。各下位因子の信頼性係数 (Cronbach の  $\alpha$ ) は、第1因子 (10項目) が.85、第2因子 (4項目) が.64であった。第1因子の項目数の多さ、第2因子の信頼性の低さを考慮し、第1因子を7項目に減じ、第2因子は項目数を増やして6項目とした。第1因子の主な項目は“目的に必要な知識、情報は積極的に収集する”、“実現可能な短期的な目標を立てて実行する” など、選択した目標を達成するための行動である選択的1次コントロールの性質を表す項目の負荷が高かったことから、“暫定選択的1次コントロール” と命名した。第2因子は“友だちに悩みや解決法などを相談する”、“落ち込んだら好きなことをしてストレスを発散させる” など、目標達成の過程で外界からの資源を活用して困難さを克服しようとする補償的1次コントロールの性質を表す項目の負荷が高かったことから、“暫定補償的1次コントロール” と命名した。

**2次コントロール** 因子分析 (主因子法・プロマックス回転) の結果、第2因子までの固有値が3.5以上で第3因子の固有値が1.74と急落すること、第2因子までの累積寄与率が32.88%であったことから2因子解を採択した。因子負荷量が.40以下の項目を削除した後、再び因子分析を行ったところ、2因子構造が認められた。各下位因子の信頼性係数 (Cronbach の  $\alpha$ ) は、第1因子 (17項目) が.89、第2因子 (9項目) が.77であった。第1因子を8項目に減じ、第2因子はそのまま9項目とした。第1因子の主な項目は“自分の夢や将来のためだから、辛くてもがまんする”、“とうていうまく行かなそうでも、納得するまであきらめない” など、選択した目標に動機づけなどの認知的資源を集中させる選択的2次コントロールの性質を表す項目の負荷が高かったことから、“暫

定選択的2次コントロール”と命名した。第2因子は“思ったほどうまく行かなくとも、あまり深刻に考えすぎない”、“ものごとの良いほうの面を考えようとしている”など、失敗などの際の情動的・動機づけの資源の減少を認知的に緩和する補償的2次コントロールの性質を表す項目の負荷が高かったことから、“暫定補償的2次コントロール”と命名した。

## 研究1

### 目的

1次コントロール暫定尺度、2次コントロール暫定尺度を合わせたコントロール尺度を作成し、因子構造及び信頼性を検討する。

### 方法

**調査対象と手続き** 平成16年7月～9月に首都圏内および近畿圏内の女子新規就職者369名を対象に質問紙調査を実施し、236名より有効回答を得た。

**質問紙の内容** 1次コントロール暫定尺度13項目、2次コントロール暫定尺度17項目を合わせたコントロール尺度30項目を用いてコントロール方略を測定した。1次コントロール項目については“そうしない”から“とてもそうする”まで、2次コントロール項目については“そうではない”から“かなりそうだ”までの5件法で各々評定を求めた。

### 結果と考察

**因子構造** 主因子法・プロマックス回転での因子分析を行った結果、第4因子までの固有値が1.5以上で累積寄与率が45.51%であったこと、ならびに解釈可能性から4因子が最も適切な因子数と判断された。因子負荷量が.40以下の項目および2因子に.40以上の因子負荷量を持つ項目を削除した後、再び因子分析を行い、4因子構造を確定した(Table1)。第1因子は、選択的1次コントロールの特徴を表す項目の負荷が高く、暫定選択的1次コントロールの7項目中5項目が含まれていることから“選択的1次コントロール”、第2因子は、補償的1次コントロールの特徴を表す項目の負荷が高く、暫定補償的1次コントロールの6項目中5項目が含まれていることから“補償的1次コントロール”、第3因子は、選択的2次コントロールの特徴を表す項目の負荷が高く、暫定選択的2次コントロール8項目中5項目が含まれていることから、“選択的2次コントロール”、第4因子は、補償的2次コントロールの特徴を表す項目の負荷が高く、暫定補償的2次コントロール9項目中7項目が含まれていることから“補償的1次コントロール”とそれぞれ命名した。

**信頼性の検討** 上述の因子分析によって得られた各下位尺度の $\alpha$ 係数を算出したところ、選択的1次で.72、補償的1次で.76、選択的2次で.77、補償的2次で.84という値が得られ、それぞれの下位尺度の信頼性が確認された。また、下位尺度間の相関係数を求めたところ、補償的1次と補償的2次が-.01であったが、それ以外はいずれの下位コントロール尺度の間にも低～中程度の正の相関( $r = .11 \sim .33$ )が認められた。このことから4回下位尺度においても、1次・2次、選択性・補償性が独立した機能を持ちながらも相克するものではないことが示唆される。さらに、同一対象者に対し半年後に再び同じ内容の質問紙調査を行い、有効回答が得られた207名について再テスト法による内部一貫性の検討を行った。第2回目の調査における $\alpha$ 係数は各下位尺度.74～.82で、2回の調査を通して安定した数値であった。また、第1回目、第2回目の調査における各下位尺度の尺度得点間の相関係数( $r$ )は、選択的1次が.67、補償的1次が.60、選択的2次が.65、補償的2次が.81と、やはり尺度の安定性を示す数値を示した。これらの検討結果から、コントロール尺度の信頼性が確認された。

Table 1  
コントロール尺度の因子分析結果

	I	II	III	IV
I 選択的1次コントロール				
仕事や勉強の仕方など、自分なりの工夫をする	.74	-.05	.04	-.04
実現可能な短期的な目標を立てて実行する	.64	.08	-.19	.01
うまく行かない時は、なぜだめなのか考えてその後に役立てる	.58	.05	.03	-.12
仕事や勉強に必要な知識や情報は積極的に収集する	.57	.01	-.03	-.01
長期的な計画を立てて、視野に入れておくようにする	.41	-.10	.08	.02
やるべきことに力を注いで不安を吹き飛ばす	.37	.13	.12	.02
II 補償的1次コントロール				
行き詰ったり不安な時は誰かに話を聞いてもらい気を持ち直す	-.06	.81	-.07	-.15
思うように行かなくて落ち込んだら、友だちとしゃべったり食事をする	-.03	.72	.03	.01
思うように行かなくて焦ったら誰かに相談してまたがんばる	.06	.70	-.01	-.08
落ち込んだら好きなことをしてストレスを発散させる	.16	.40	-.01	.22
仕事や勉強で疲れたらゆっくりしたり気晴らししてまたがんばる	.17	.33	.12	.09
III 選択的2次コントロール				
なかなかうまく行かなくても努力してがんばることが大事だ	-.10	.11	.83	-.04
とうていうまく行かなそうでも、納得するまであきらめない	.12	-.13	.69	.01
うまく行きそうにないことは初めからがんばらない <sup>a)</sup>	-.40	-.07	.63	-.05
たいへんなことも一生懸命がんばる	.08	.07	.60	.08
がんばれば、努力はきっと報われると思う	-.10	.18	.54	.11
やってもだめなことはあきらめて、他の事をするよう気持ちを替える <sup>a)</sup>	.01	-.23	.48	-.18
自分の夢や将来のためだから、つらくてもがまんする	.01	.08	.36	.03
IV 補償的2次コントロール				
うまく行かなかったことはあまりくよくよ考えない	-.07	.01	-.10	.79
思ったほどうまく行かなくても、あまり深刻に考えすぎない	.11	-.12	-.11	.77
失敗したことをあれこれといつまでも悔やんでしまう <sup>a)</sup>	.01	-.09	-.02	.77
ものごとの良い面を考えるようにする	.18	.01	.13	.69
先のことを考えて不安になり過ぎないようにする	-.01	-.09	.08	.58
結局、最後は何とかなると信じている	-.16	.11	.16	.53
不安を感じても特に対処しない。なるようになると思う	-.22	.08	-.12	.51

a) は逆転項目。

## 研究 2

### 目的

コントロール尺度の構成概念妥当性を検討する。

### 方法

**調査対象と手続き** 平成 17 年 6 月～7 月に首都圏内および近畿圏内の大学進学を希望する高校 2, 3 年生 1,192 名 (2 年生 558 名, 3 年生 546 名, 女子 517 名, 男子 587 名) を対象に, 授業時間の一部を利用し質問紙調査を実施した。

**質問紙の構成** ①コントロール尺度: 研究 1 で作成した尺度を使用。②コーピング: 久田・箕口・千田 (1990) による大学受験生のコーピング尺度を使用。積極的対処, サポート利用, 受動的対処の 3 因子 20 項目からなる。“そうしない” から “とてもそうする” までの 5 件法で評定を求めた。③情動: 正の情動 2 項目 (楽しい, うれしい), 負の情動 7 項目 (悲しい, 不安だ, 落ち込む, 怒り, がっかり, 恥ずかしい, 自己嫌悪) について, “全く感じない” から “とても多く感じる” までの 6 件法で評定を求めた。④抑うつ: 自己評価式抑うつ尺度 (SDS) を使用。この 1 週間のうちに感じた抑うつについて “めったにない” から “いつも感じた” までの 4 件法で評定を求めた。⑤反芻思考: 伊藤・竹中・上里 (2001) によるネガティブな反すう尺度のうち反すう傾向 6 項目を使用。“そうしない” から “とてもそうする” までの 5 件法で評定を求めた。⑥達成動機: 堀野 (1987) による尺度から競争的達成動機 8 項目, 自己充實的達成動機 8 項目を使用。“全くそうではない” から “とてもそうだ” までの 5 件法で評定を求めた。

### 結果と考察

**尺度構成と信頼性の検討** コントロール尺度 25 項目に対し主因子法・プロマックス回転による因子分析を行ったところ, 選択的 1 次, 選択的 2 次, 補償的 1 次, 補償的 2 次の 4 因子構造であることが確認され, Cronbach の  $\alpha$  も各下位尺度 .76～.78 と高い信頼性を示した。

Table 2

コントロール尺度とコーピング尺度との相関

	積極的対処	サポート利用	受動的対処
選択的 1 次	.67 <sup>**</sup>	.28 <sup>**</sup>	-.29 <sup>**</sup>
補償的 1 次	.37 <sup>**</sup>	.64 <sup>**</sup>	.06
選択的 2 次	.61 <sup>**</sup>	.23 <sup>**</sup>	-.37 <sup>**</sup>
補償的 2 次	.07	.02	.28 <sup>**</sup>

<sup>\*</sup> $p < .05$ , <sup>\*\*</sup> $p < .001$

**構成概念妥当性の検討** 同一特性を理論的に類似した異尺度で測定した場合の関連性を示す収束的妥当性を検討するために, コーピング下位尺度との相関係数を求めたところ, 選択的 1 次と選択的 2 次は積極的対処と, 補償的 1 次はサポート利用と, 補償的 2 次は受動的対処と, それぞれ正の相関を示した (Table 2)。積極的対処とはストレスの影響を自分の力で減じようとする方略であり, また, 対処行動を表す項目 (“計画を立て直し, それを実行するように努力する” など) と認知的な働きを表す項目 (“とにかくがんばろうと自分に言い聞かす” など) を一緒に含むことから, 目標達成に向けた行動方略, 認知的方略である選択的 1 次, 選択的 2 次との関連が示唆された。また, 社会的サポートを用いての問題対処を表すサポート利用と補償的 1 次, ストレッサーによ

り生じた負の情動への対処法である受動的対処と補償的2次との関係性も示唆された。以上のことから、コントロール尺度の収束的妥当性が裏付けられたと言える。

次に、精神的健康を構成する各変数および達成動機との関係を検討した。正・負の情動、抑うつ、反芻思考、達成動機とコントロール各下位尺度との相関係数を求めた (Table 3) ところ、正の情動は選択的1次・2次、補償的1次・2次と正の相関、負の情動は補償的2次と負の相関、抑うつは選択的1次・2次、補償的1次・2次と負の相関、反芻思考は補償的2次と負の相関を示した。情動および抑うつと1次・2次コントロールの結びつきは先行研究の知見とも一致していることから、その関係性が裏付けられたと言える。また、ともに認知的な働きでありながら、負の情動や抑うつを促す (Martin & Tesser, 1996) 反芻思考と、それらを低減させる働きを持つ補償的2次との間には相克的な関係が予想されたが、両変数間の負の相関は、これを裏付けたと解釈できる。また達成動機については、他者との競争における勝利や社会的成功への志向を表す競争的達成動機は選択した目標達成のための方略である選択的1次・2次と、個人にとっての大切な目標の達成を志向する自己充實的達成動機は、選択的1次・2次とともに、補償的1次との関係性が示唆された。以上の結果から、各コントロール下位尺度の概念的な妥当性は支持されたと言える。

Table 3

コントロールおよびコーピングと精神的健康の各変数との相関

	正の情動	負の情動	抑うつ	反芻思考	競争的	自己充足的
選択的1次	.24 <sup>**</sup>	.01	-.25 <sup>**</sup>	-.09 <sup>**</sup>	.21 <sup>**</sup>	.37 <sup>**</sup>
補償的1次	.23 <sup>**</sup>	.06	-.22 <sup>**</sup>	-.04	.11 <sup>**</sup>	.31 <sup>**</sup>
選択的2次	.27 <sup>**</sup>	-.04	-.28 <sup>**</sup>	-.11 <sup>**</sup>	.17 <sup>**</sup>	.49 <sup>**</sup>
補償的2次	.17 <sup>**</sup>	-.29 <sup>**</sup>	-.36 <sup>**</sup>	-.52 <sup>**</sup>	-.07	.08 <sup>**</sup>

\* $p < .05$ , \*\* $p < .001$

収束的妥当性の検討により、コントロール尺度のコーピング尺度との概念的共通性が明らかとなったが、脅威やストレスへの対処方略を測定するコーピング尺度と、脅威やストレスをも含めた目的達成プロセスにおける方略を測定するコントロール尺度では、その機能に相違があると考えられる。そこで、コントロール尺度の独自性を検討するために、精神的健康の各変数および達成動機を目的変数とした階層的重回帰分析 (ステップワイズ法) を行った結果、コントロール下位尺度を投入した第2ステップで決定係数にいずれも有意な増分が認められた (Table 4)。特に、正の情動に対しては、目標達成のための認知的対処である選択的2次や、失敗・喪失時の情動を変化させるための認知的方略である補償的2次が寄与を示した。負の情動に対しては、コーピングの積極的対処、サポート利用が正の影響を示したのに対し、コントロールの選択的2次、補償的2次はともに、負の情動を緩和する働きを示した。また、抑うつに対しては選択的2次、補償的1次・2次が、反芻思考に対しては補償的2次が緩和する働きを示した。また達成動機の2変数においても、コーピング下位尺度とコントロールの下位尺度にはその働きに差異が見られた。これらのことからコントロール尺度とコーピング尺度との弁別性が明らかとなったと言えよう。

Table 4

情動, 抑うつ, 達成動機を目的変数とした重回帰分析結果

	正の情動	負の情動	抑うつ	反芻思考	競争的	自己充足的
	$\beta$	$\beta$	$\beta$	$\beta$	$\beta$	$\beta$
ステップ1						
積極的対処	.24***	.01	-.26***	-.14***	.26***	.42***
サポート利用	.14***	.22***	.02	.15***	.06	.11***
受動的対処	.07	-.04	-.02	-.05	.01	.01
	$R^2 = .09$ ***	$R^2 = .05$ ***	$R^2 = .06$ ***	$R^2 = .02$ ***	$R^2 = .08$ ***	$R^2 = .21$ ***
ステップ2						
積極的対処	.08	.20***	-.04	.05	.26***	.20***
サポート利用	.11	.24***	.07	-.14***	.06	.02
受動的対処	.06	.03	.07	-.14***	.07	.09
選択的1次	.06	-.08	-.05	-.01	.06	.04
補償的1次	.04	-.05	-.13***	-.06	-.02	.10
選択的2次	.16***	-.14*	-.18***	-.09*	-.01	.34***
補償的2次	.13***	-.31***	-.35***	-.56***	-.13***	.01
	$R^2 = .13$ ***	$R^2 = .16$ ***	$R^2 = .22$ ***	$R^2 = .32$ ***	$R^2 = .10$ ***	$R^2 = .30$ ***
$R^2$ 変化量	.04***	.12***	.16***	.29***	.02**	.08***

\* $p < .05$ , \*\* $p < .001$ , \*\*\* $p < .0001$

### まとめ

本研究では生涯コントロール理論 (e.g., Heckhausen & Schulz, 1995) に沿い, より外的妥当性の高いコントロール尺度の作成を試みた。その結果, 理論どおり選択的1次, 補償的1次, 選択的2次, 補償的2次の4因子構造を持った尺度が見出された。これまでの既存のコントロール方略についての尺度 (e.g., Heckhausen & Schulz, 1998) では, 実際的な方略があまり述べられてこなかったが, 本尺度では面接調査により対処方略を収集したことで, より具体性の高い方略が示されたと言えよう。信頼性については, 大学受験生と女子新規就職者の双方において, コントロール尺度の安定した信頼性が示され, 青年期, 成人前期を通じての本尺度の適用可能性が示唆された。構成概念妥当性については, コーピング, 精神的健康, 達成動機との関連性を検討した結果, コーピング尺度との収束的妥当性, 精神的健康, 達成動機との関連性など, 先行研究でも予測された結果が見出されたことから, コントロール尺度の妥当性が認められたと言える。一方, 独自性の点では, 精神的健康および達成動機を目的変数とした階層的重回帰分析 (Table 4) において, コントロール下位尺度を投入した際, コーピング下位尺度のみの投入よりも決定係数にいずれも有意な増分が認められたこと, また, 正の情動および自己充實的達成動機を高める一方, 負の情動, 抑うつ, 反芻思考を抑制する各コントロール方略の働きが見出されたことに, コントロール尺



度のコーピング尺度とは異なる独自の機能性が示された。このことからコントロール方略が、ストレスへの対処であるコーピング過程をも内包した目的達成過程に対応した、より包括的な認知的・行動的対処方略であると考えられる。

今後の課題としては、個人間の状況の差異によるコントロール方略の比重の違いの検討が必要であろう。抑うつに対する各下位尺度の働きについては、環境への自己の影響力に対する信念が高い場合は1次コントロール、低い場合は2次コントロールが抑うつの低減に効果的であるとされる(e.g., Thompson, Nanni, & Levine, 1994)が、本研究では、選択的2次、補償的1次・2次が抑うつの低減に寄与していることが示された。調査対象者である受験生の場合、目的の達成とは志望大学への合格であるが、その過程においては受験合否への直接的なコントロールは行い難く、そのために2次コントロールや、1次でも補償的な行動方略がとられていることが推測される。Heckhausen (1995) は世代差によるコントロール方略の比重の変化について論じているが、同じ世代においても、目的達成プロセスにおける状況の差異によるコントロール方略の使用の異なりを検討することは、重要であろう。また、本調査では、青年期・成人前期におけるコントロール尺度の適用可能性が示唆されたが、今後、より幅広い年齢層、状況の対象者に調査を行うことにより、全てのライフステージに対応する生涯コントロール尺度の作成および妥当性の検討が望まれる。

## 謝 辞

調査にご協力下さった高校生、大学生の皆さんと先生各位、新規就職者の方々に心より御礼申し上げます。また、研究に当たりご指導下さった無藤隆先生に深く感謝申し上げます。

## 文 献

- Carver, C. S., & Scheier, M. F. 1981 *Attention and self-regulation: A control-theory approach to human behavior*. New York; Berlin: Springer-Verlag
- Baltes, P.B., & Baltes, M.M. 1990 Psychological perspectives on successful aging: The model of selective optimization with compensation. In P.B. Baltes & M.M. Baltes (Eds) , *Successful aging: Perspectives from the behavioral science*. Cambridge University press. Pp.33-76
- Carver, C.S. 1996 Goal engagement and the Human Experience. In R. S. Wyler, Jr. (Ed.) , *Ruminative thoughts, advances in social cognition*, **10**. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- 福田一彦・小林重雄 1973 自己評価式抑うつ尺度の研究 精神神経学雑誌, **75**, 673-679.
- Heckhausen, J., & Schulz, R. 1995 A life-span theory of control. *Psychological Review*, **102**, 284-304.
- Heckhausen, J., & Schulz, R. 1998 Developmental regulation in adulthood: Selection and compensation via primary and secondary control. In J. Heckhausen & C. S. Dweck (Eds) , *Motivation and self-regulation across the life span*. Cambridge University press. Pp.50-77
- 久田満・箕口雅博・千田茂博 1990 大学受験生のコーピングとソーシャル・サポート 日本教育心理学会第32回大会発表論文集, 478.
- 堀野 緑・森 和代 1991 抑うつとソーシャルサポートとの関連に介在する達成動機の要因 教育心理学研究, **39**, 308-315.
- 五十嵐 敦 2002 中年期の適応過程に関する研究: OPS スケールによる Developmental Regulation の検討 日本発達心理学会第13回大会発表論文集, 360.
- 伊藤 拓・竹中晃二・上里一郎 2001 うつ状態に関与する心理的要因の検討—ネガティブな反すうと完全主義, メランコリー型性格, 帰属様式との比較— 健康心理学研究, **14**, 11-23.
- Lazarus, R. S., & Folkman, S. 1984 *Stress, appraisal, and coping*. New York: Springer Publishing Company.
- Martin, L. & Tesser, A. 1996 Ruminative thoughts. In R. S. Wyler, Jr. (Ed.) , *Ruminative thoughts, advances in social cognition*, **10**. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- 尾関友佳子 1993 大学生用ストレス自己評価尺度の改定: トランスアクション的な分析に向けて 久留米大学大学院比較文化研究科年報, **1**, 95-114.

- Rothbaum, F., Weisz, J. R., & Snyder, S. S. (1982). Changing the world and changing the self: A two process model of perceived control. *Journal of Personality and Social Psychology*, **42**, 5-37.
- Schulz, R., & Heckhausen, J. 1993 Emotion and control: A life-span perspective. *Annual Review of Gerontology and Geriatrics*, **17**, 185-205.
- Skinner, E. A., Edge, K., Altman, J., & Sherwood, H. 2003 Searching for the structure of coping: A review and critique of category systems for classifying ways of coping. *Psychological Bulletin*, **129**, 216-269.
- Thurber, C. A., & Weisz, J. R. 1997 "You can try or you can just give up": The impact of perceived control and coping style on childhood homesickness. *Developmental Psychology*, **33**, 508-517.
- Thompson, S. C., Collins, M. A., Newcomb, M. D., & Hunt, W. 1996 On fighting versus accepting stressful circumstances: primary and secondary control among HIV-positive men in prison. *Journal of Personality and Social Psychology*, **70**, 1307-1317
- Thompson, S. C., Nanni, C., & Levine, A. 1994 Primary versus secondary and central versus consequence-related control in HIV-positive men. *Journal of personality and Social Psychology*, **67**, 540-547.
- 塚原拓馬 2002 二次的コントロール尺度作成の試み—LH理論における統制の知覚要因— 青山心理学研究, **2**, 27 - 36.
- Weisz, J. R., Thurber, C. A., Sweeney, L., Proffitt, V. D., & LeGagnox, G. L. 1997 Brief treatment of mild-to-moderate child depression using primary and secondary control enhancement training. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **65**-4, 703-707.

(2005年12月1日受理)